

< 今日の説教のポイント ヨハネ福音書 20:19-23、使徒言行録 2:1-4 >

1 ペンテコステとは？ ヨハネ福音書では？

ペンテコステ、これは使徒言行録 2 章に記された、弟子たちに起こった聖霊降臨の出来事から来ていますが、ヨハネ福音書ではすでにその前に復活されたイエス様が弟子たちに現れて聖霊を与えておられます (20 章 19-23 節)。この違いはどう考えればいいのでしょうか？

2 遣わす — 聖霊を受ける — 罪が赦される

ヨハネ福音書は他の 3 つの福音書を知った上で、イエス様に起こった出来事の意味を特に伝えようとして書かれた福音書です。一見不思議に思えるペンテコステの出来事もその意味をくみ取ることが重要であったように、ヨハネ福音書が伝えようとしたことは何かに耳を傾けようとするのが大事です。記されていることは、①復活されたイエス様が弟子たちを「遣わす」と言われ、②聖霊を与えられた後に、③全ての人の罪を赦す務めを託されたということです。

3 父が御子にされたように、御子が弟子たちにされた！

イエス様は「父が私をお遣わしになったように」と言われています。この「父が子に」「子が弟子たちに」関係がヨハネ福音書には多く出て来ます(特に 17 章。18-19, 21, 23, 25-26)。これが聖書の神様のなさり方なのであり、その時に「聖霊が」と出て来るのです。ここで「聖霊がどのようにして」を問うのではなく、「神様がこうしてなされるのだ」という神の事実を重く捉えることが大事です。神がなさる、「神にはできる」(ルカ 18:27)、それが聖霊について考える時に大事なことです。

4 私たちが赦すこと、そこに伝道展開と教会形成の根拠がある！

全ての人の罪の赦しが弟子たち(信仰者、私たち!)に託されたということで、「私たちにその権限があるのだ」的なことを考えるのは間違いです。むしろ私たち自身がイエス・キリストによって私の罪を赦していただいたことを深く受けとめ、イエス様のように他の人の罪を赦す者となっているか、そのことを考えなければなりません。難しいことですが、神様に祈りながら取り組み、それがなされて行くときに、聖霊は注がれる、つまり神様が私たちに働いて下さるのです。それがなされない時、聖霊は私たちから去っているのです。ヨハネ福音書が愛と赦しを強調していることとも一致します(13:31-35)。